

慣用句の分類とその応用

小池 清治；スベトラ＝キロワ

本稿は小池清治が担当する第一部とスベトラ＝キロワが担当する第二部とよりなる。

第一部 慣用句の分類について

第二部 14か国語の慣用句（諺）の比較調査

第一部 慣用句の分類について

小池 清治

1 慣用句の分類Ⅰ

各語の総和では説明しにくい固有の意味を構成するという点で、意味的には一語的であり、かつ、接合部に他の要素を挿入することを許すという点で、文法的には一語的でない、文節以上文以下のまとまりを慣用句という。

慣用句は、中心となる語の品詞により次のように分類される。

動詞慣用句：頭が切れる・頭に来る・頭を痛める・目が合う・目が利く・目が届く・幅を利かす・鼻にかける・骨を折る・骨を惜しむ・割りを食う

形容詞慣用句：頭が痛い・頭が重い・頭が固い・頭が高い・影も形もない・敷居が高い・手が早い・耳が早い

* 他の品詞は、連語または複合語になり、慣用句になるものはない。

動詞慣用句は常に動詞として用いられるわけではない。

彼は頭が切れる（賢い・利口だ）。

＝説明部に用いられ、形容詞、形容動詞相当の働きをする。

頭に来て、怒鳴ってしまった。

＝従属節に用いられ、動詞の働きをする。

ただし、一語として機能しているわけではない。次のように、接合部に他の要素を挿入することが可能だからである。

彼はすごく頭が切れる。

→彼は頭がすごく切れる。

かあっと頭に来て、怒鳴ってしまった。

→頭にかあっと来て、怒鳴ってしまった。

形容詞慣用句は状態性動詞や形容詞として機能する。ただし、この場合も一語化しているわけではない。

子供の件で頭が痛い（悩んでいる）よ。

→子供の件で頭がかなり痛いよ。

先生の所は敷居が高い（行きにくい）。

→先生の所は敷居がちょっと高くなった。

なお、「頭が切れる」「頭が痛い」などは、形態としては文になりうる形態であるが、これらをそのまま、これらだけで文として表現すると文字通りの意味であるのか、慣用句の意であるのか曖昧になってしまう。慣用句が誤解されることなく慣用句として機能するのは、文の部分的素材として使用される場合においてである。

2 慣用句の分類Ⅱ

慣用句をレトリックの観点から分類すると、直喩的慣用句と隠喩的慣用句・反復慣用句に分類される。

直喩的慣用句：比喩指標が明示される慣用句。

比喩指標で下位分類すると次のようになる。

a 比喩指標が「よう」であるもの：赤子の手

をひねるよう（に容易だ）・蚊の鳴くよう（な小さい声）・雲をつかむよう（にとらえどころがない）・蜘蛛の子を散らすよう（に四方八方に逃げ散る）・氷のよう（に冷たい手）・砂を噛むよう（に無味乾燥だ）・竹を割ったよう（に真っ直ぐな気性だ）・抜けるよう（に青い空）・蜂の巣をつついたよう（に大騒ぎだ）・火のついたよう（に激しく泣き叫ぶ）・蛇のよう（に執念深い）・水を打ったよう（に静まり返る）・もみじのよう（な可愛い手）・夢のよう（にはかない）・リンゴのよう（に赤い頬）

b 比喩指標が「ごとし」であるもの：雲霞のごとき（大軍）・赤貧洗うがごとし（大変な貧しさ）蛇蝎のごとく（嫌う）

c 比喩指標が「ばかり・ほど」であるもの：雲衝くばかり（の大男）・雀の涙ほどの（のボーナス）・泣かんばかり（に頼み込む）・猫の手も借りたいほど（の忙さ）・猫の額ほどの（小さな庭）

隠喩的慣用句：比喩ではあるが、比喩指標が明示されない慣用句

a 「思い」を修飾するもの：一日千秋の思い・血を吐く思い・葉にもすがる思い

b その他：鬼気迫る（雰囲気）・手を焼く（問題）・骨身にしみる（経験）・水もしたたる（好男子）・水ももらさぬ（警備態勢）・虫も殺さぬ（顔）

反復慣用句：味もそっけもない・あれもこれも・恨みつらみを並べる・うんともすんとも言わない・なりふり構わず・なんでもかんでも・にっちもさっちも行かない煮ても焼いても食えない・猫も杓子も・寝ても覚めても・のべつ幕無しに・踏んだり蹴ったり・欲も得もない

同語反復型慣用表現：同一語を反復して用い、一定の意味を加える表現。

- ① 「AはA」の型。Aは名詞。いずれにせよ、やはりAであることは動かせないの意。
- 1) なんて勝っても、勝ちも勝ち。／負けは負けだ。潔く認めよう。
 - 2) 東は東、西は西。／君は君、僕は僕、

されど仲良き。

- ② 「AことはA」の型。Aが名詞の場合＝最も知っているの意。形容詞の場合＝結果はどうあれ、一応Aであることを認めるの意。動詞の場合＝結果はどうあれ、一応Aするの意。

3) 竹のことは竹に聞け、松のことは松に聞え。

4) あの映画、面白いことは面白い。

5) 大学へは、行くことは行くけれど、どんな学問をやるか未定です。

- ③ 「AにはAを、BにはBを」の型。A Bともに名詞。最もふさわしいの意。

6) 目には目を、歯には歯を。

- ④ 「AのなかのA」の型。Aは名詞。賞賛の意の意を込めて典型と認めるの意。

7) 男のなかの男／猛獣のなかの猛獣／花のなかの花

- ⑤ 「AはAで」の型。Aは人名詞。AはAの能力範囲での意。

8) 夫は夫で、打開策を考えているらしい。

- ⑥ 「AはAなりに」の型。cに同じ。

9) 妻は妻なりに、打開策を考えているらしい。

- ⑦ 「AもAなら、BもBだ」の型。A、Bともに人名詞。A、Bともに軽蔑や非難に値するの意。

10) 夫も夫なら、妻も妻だ。

- ⑧ 「AというA」の型。Aは名詞。あらゆるAの意。

11) 漬物という漬物は、まったく食べない。

- ⑨ 「AまたA」の型。Aが連続的に多数存在するの意。

12) 涙また涙／人また人／山また山

- ⑩ 「A1にA2」の型。A1は動詞の連用形、A2は同一動詞の他の活用形。徹底的にAするの意。

13) 悩みに悩んだ末、結局、断念した。

- ⑪ 「AてもAても」の型。Aは動詞の促音連用形。いくらAしても効果がないの意。

14) 追っても追っても、着いてくるボチはほんとに可愛いな。

参考文献 白石大二『日本語のイディオム』(三省堂, 1950) 同『日本語の発想—語源・イディオム』(東京堂出版, 1961) 同『国語慣用句大辞典』(東京堂出版, 1977) 文化庁編『語源・慣用語』(教育出版, 1975) 宮地裕『慣用句の意味と用法』(明治書院, 1982) 同「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語」(『日本語学』4巻1号, 明治書院, 1985) 飛鳥博臣「日本語動詞慣用句の階層性」(『月刊言語』11巻13号, 大修館書店, 1982) 大坪喜子「名詞慣用句—特に隠語的慣用句について—」(『日本語学』4巻1号, 明治書院, 1985) 國廣哲弥「慣用句論」(『日本語学』4巻1号, 明治書院, 1985) 中村明「慣用句と比喩表現」(『日本語学』4巻1号, 明治書院, 1985) 西尾寅弥「形容詞慣用句」(『日本語学』4巻1号, 明治書院, 1985) 村木新次郎「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」(『日本語学』4巻1号, 明治書院, 1985) 森田良行「動詞慣用句」(『日本語学』4巻1号, 明治書院, 1985)

第二部 14か国語の慣用句の比較調査

スベトラ＝キロワ

この調査は14ヶ国語において、10項目の慣用句を各言語で調べたものである。実際に其々の言語を母語とする者に質問し、確認しているので、これらの表現が現在も使用されていることは確かである。

3.1 調査に取り上げた慣用句

日本語とブルガリア語の慣用句の相違は東洋と西洋の相違を表現すると想定して、その確認をするためにこの調査を行った。

1. 「頭からつま先まで」

全身を表わすこの慣用句は多くの言語で出発点は頭だが、スペイン語とベトナム語でそれは足である。大昔、獣や困難から逃避することを考えて、

足が一番重要な身体部位であった。しかし、社会の発展と人間の進出により頭が体の中で一番重視されてきている。以上のようなことを念頭において、スペイン語とベトナム語の慣用句が一番早く生まれたと想定する。

一番上の身体部位はどの言語でも頭である。しかし、下の部位には様々な語がある：つま先、踵、足首、足、足の底。日本語、英語、韓国語ではつま先を使用しており、人間が寝ている様子から生まれた表現である。それに対して、ブルガリア語、タイ語、ドイツ語、トルコ語では「足から踵まで」と言っており、人間が立っているときに身長を測るとき様子である。ギリシア語の場合には足首を使用し、体を正面から見たとらえ方である。

2. 「海老で鯛を釣る」

この慣用句は東洋で生まれた表現だと言える。西洋ではブルガリア語以外に対応するものがない。全ての慣用句は二つのグループに分けられる—商業的考え方(韓国語、モンゴル語、中国語)と漁業的考え方(日本語、タイ語、ベトナム語、ブルガリア語、トルコ語)である。

3. 「首が飛ぶ」

この慣用句から分かるように、東洋と西洋とでは命を表わす身体部位には異なる傾向があると言える。東洋ではそれは首で、西洋では頭である。中世、フランスでは死刑としてギロチンが発明され、その影響が西洋の表現に見られる。東洋の表現では、刀を使って、命をとることが基になっているので、頭ではなく、首になった。現在、この表現は元の意味から離れて、比喩的に使用されている。

4. 「出鼻を挫かれる」

この表現にも東洋と西洋とでははっきりした傾向が見られる。西洋では翼は神性の印、意志、創造力の象徴である。反対の表現「翼を与えられた」という慣用句は自信、力、励ましの言葉などをもたらったときに使用される。また、「翼が生えてきた」という表現は強い意志を持って、精神的に強い人のために使用される。それは自信、力、勢力に満ちているという表現である。

それに対して、東洋では前進することは体の中で鼻で表現されている。鼻は感覚器官として重視されている。